

観光地域の発展と衰退

——バトラーのライフ・サイクルモデルの紹介——

中 崎 茂

1. はじめに
2. 考察の対象と視点
3. バトラーのライフサイクル仮説の全容（試訳）

1. はじめに

観光地域は、観光旅行者を引きつける多様な観光資源（魅力の対象）を開発・提供し、それらを通してそれぞれ特有の歴史を形成している。このような観光地域のほとんどが（とくに持続的観光開発、適正収容量の視点を問題にしない場合）、大量の観光旅行者の動向を観光開発（あるいは再開発）や観光事業の運営・管理の際の主要な目安（指標）にしている。このような観光旅行者（観光需要）の動向に注目して観光地域の推移を辿ると、そこには生産物のライフ・サイクルに似た変遷が見られるようだ。

このような観光地域の変遷を、この生産物のライフ・サイクルを手掛かりにしてモデル化し、観光旅行者の特性や観光地域の空間利用の変容を論じたのが、観光地理学者のバトラー（R. W. BUTLER）である。

バトラーが仮説した観光地域におけるライフ・サイクルモデルは、観光開発（tourist development）に関心のある人々に多くの示唆を与えており、内外でしばしば引用されるなど観光地域研究の重要な文献とみなされている^(註1)。また、このライフ・サイクルモデルでは、特定の観光地域における観光旅行者の人数の増減のみを表すものでなく、観光旅行者のタイプや観光ビジネスの参入状況など観光地域の市場環境を反映するため、観光地域の発展段階に応じたマーケティングの課題を示すものとして、観光マーケティング（marketing tourism destination）の面からも注目されている^(註2)。更にバトラーの仮説の中心的な概念には、「適正収容能力 carrying capacity」や「ライフ・サイクル life cycle モデル」があり、前者は観光地域がもつ自然的・社会的な意味での収容許容量のことで

あり、静態的な収容能力を規定する要因といえる。後者は、観光地域における観光旅行者を引きつける魅力要因（attraction）と観光需要（ニーズ）の関係から、ライフ・サイクルの各段階ごとに動態的な収容能力を示すものである。これら2つの概念は、21世紀に向けた持続的な開発を考察する際の手掛かりを与えてくれるものであり、今後とも折りに触れて注目されるものと思われる。

（注1） バトラーのライフサイクルや適正な収容能力を紹介・解説している国内と海外の文献（一例）には以下のものがある。

- 1) 西岡久雄「バトラーとティスデルの観光地域論」、駿河台大学『文化情報学』3号1巻、1996、とくに pp. 81～85。
 - 2) 小沢健市『観光を経済学する』、文化書房博文社、1994、pp. 218～223。
 - 3) 村上和夫「観光地の運営」、塩田正志・長谷政弘編著『観光学』同文館、1994。
 - 4) 佐藤俊雄監修訳『観光のクロス・インパクト——経済・環境・社会への影響——』1990年、大明堂。
 - 5) Alister Mathieson Geoffrey Wall, “Tourism: economic, physical and social impacts”, Longman Group Limited, 1982.
 - 6) Douglas Pearce, “Tourist Development”, second edition, 1989.
- （注2） 徳久球雄編著『環太平洋地域における国際観光』嵯峨野書院、1995、pp. 61～62。

バトラーのサイクル仮説は、このように多方面から注目を集めているが、ほとんどの著作（上記、注1の文献でも同様である）においてその骨子あるいはサイクルの概念図が紹介されているにすぎない。その中で、バトラーの論文(Butler、1980)の内容をより詳しく紹介したものは、現在のところ西岡教授の論文（1996、注3）の他に見当たらないようだ。

（注3） 西岡教授はバトラー論文の詳細な紹介の後に、バトラーの中心的な概念である「適正収容能力 carrying capacity」をティスデル（Tisdell、1991）に沿って検討を加えられている。西岡久雄「バトラーとティスデルの観光地域論」、駿河台大学『文化情報学』3号1巻、1996、とくに pp. 81～85。

2. 考察の対象と視点

観光地域の研究文献の一つとしてバトラー論文の全容を認識しておくこと、またこの

バトラーの仮説を実際の観光リゾート地域に適用する際の有効性や今後検討すべき課題等を明らかにしておくことは、今後の観光リゾート地域のより望ましい展開方向を考察する上で、必要かつ有効であると思われる。

このような認識の下に、小論は、観光地域のライフサイクルの事例研究、およびバトラー仮説の特性や現実への適用上の課題等の検討に先立って、浅学非才を省みず、バトラー仮説の全容を提示しようとしたものである。ここに示したバトラーの仮説は、その原文である、Butler, R. W. (1980), "The Concept of A Tourist Area Cycle of Evolution: Implications for Management of Resources", *Canadian Geographer* vol. 24, no. 1, 1980, pp. 5-12 に沿って論述（抄訳）したものである。

なお、この論述にあたっては、バトラーの原文のうち仏語で書かれている部分（サイクル論の意義や観光資源の利用計画への適用に資することの意図を示した8行分）は、割愛してある。また、原文に示されている参考文献の全てについて、それらの内容の確認を行っているわけではなく、それゆえ、内容の理解に不足あるいは錯誤の部分があるかも知れない。このような箇所、内容等については今後、多くの方々の叱責や指摘をふまえて改善・修正を行いたい。なお、本論述にあたり多忙にかかわらず貴重な指摘をいただいた流通経済大学の大西哲先生、知念民雄先生にはこの場を借りて御礼申し上げます。

3. バトラーのライフサイクル仮説の全容紹介

バトラーが観光地域のライフサイクルを論じた論文のタイトルは、THE CONCEPT OF TOURIST AREA CYCLE OF EVOLUTION: IMPLICATIONS FOR MANAGEMENT OF RESOURCES である。このバトラーの観光地域における進展のサイクル論を、できるだけ原文に沿って以下に試訳してある。なお〔 〕は訳者が加えたものである。

——観光地域の発展サイクル概念——

本論は、観光地域 (tourist areas) の発展において明らかに見られる循環の概念について、観光地域の人気徐徐に高まりやがて弱まっていくことを示す・典型的なS字カーブを用いて、説明するものである。また、将来生じうる変動の推移と関連づけながら、循環的に起こる発展の特定の段階について、論ずるものである。観光資源 (tourist resources) の開発計画や管理運用にあたり、このS字カーブのモデルと関係づけて環境の質 (the environmental quality) がたえず悪化すること、またそれゆえに多くの観光地域の魅力 (attractiveness) も減少する傾向を示すこと、について論じようとするものである。

観光地域はダイナミックに変動するものであり、時の経過とともに発展することはほとんど疑いの余地が無い。この発展の概念は、訪れる観光客の嗜好やニーズの変化、建造物や設備において徐々に進む老朽化や可能な範囲で行われる再整備、及びその観光地域が最初に人を引きつける基になった・そのものが本来的にもっていた自然的・文化的な魅力の変化（あるいは消滅）など、様々な要因から引き起こされるものである。ある場合には、このような観光地域としての魅力がまだ残存している時ですら、それら「観光地域の魅力」が別な目的に利用されたり、あるいは「後から」持ち込まれた「観光的な」魅力に比べてそれほど重要視されなくなったりする¹⁾。観光地域がたどるコンスタントな「発展の」過程について考察したクリスタラー (Christaller) は、次のように明確に述べている。

観光地域の発展についての典型的な道筋は、以下のパターンで示される。[ステップⅠ] 画家は、いまだ人が手を付けていなく、しかも「通常と」異なる場所を画題にしようと探しまわる。[ステップⅡ] やがてその場所は、言うなれば芸術家の集まる場所として展開されていく。[ステップⅢ] やがて今度は詩人達がそのあとを追って押し寄せてくる。彼らもまた、画家と同類の種族だからである。[ステップⅣ] そして映画製作者、美食家、そして裕福でハイカラな貴公子たちが集まるようになる。[ステップⅤ] この場所はやがて流行の土地となり、企業家たちが目をつけるようになる。漁師の小屋や避難小屋は下宿屋に変身し、続いてホテルが登場する。[ステップⅥ] そうなると、画家達は逃げ出し、周辺の他の場所でスペースが広く、比喩的な表現を用いれば「忘れられた」場所 (forgotten places) や風景の良いところを探し回る。このような場所に滞まるのは、商業ベースに乗っかってうまく儲けたいと思う・商売気のある画家だけである。こうした連中は、画家たちがいたという高い評判を活用し、また観光客のだまされやすさ (the gullibility of tourists) を巧みに利用するのである。[ステップⅦ] 益々多くの都会人が、今や新聞紙上で宣伝され流行となっている・この場所を選択して来ることになる。その結果、美食家や真のレクリエーション (real recreation) を求める人々は、ほとんどこの場所にやってこなくなる。[ステップⅧ] しまいには、旅行代理店が、パッケージツアー料金の観光旅行団体を引き連れてやってくる。やがてこのような気儘な人々もこの場所を避けるようになる。時を同じくして他の場所でもこれと同じような外来者が出入りするに伴い一種のサイクルが生じることになる。[このように]、多くの場所が「外来者の」注目を浴びるようになると、その場所の「観光地域としての」タイプは変容し、やがて皆が押し寄せてくる観光地になっていく²⁾。

上の記述は、欧州、とくに地中海沿岸域に関するものであるが、このほかにも同様の一般概念 (the same general idea) を表わしている人がいる。すなわち、スタンスファイ

ールド (Stansfield) は、アトランティック・シティ (Atlantic City) の発展を論じており、そのなかで特にリゾート地域の発展 (resort cycle) について言及している³⁾。またノロンハ (Noronha) は、観光の発展は3段階 (three stages) で展開すると示唆している。つまり、i) 発見段階 (discovery)、ii) 地元の対応と主導権争いの段階 (local response and initiative)、iii) 規格化された施設整備の段階 (institutionalized institutionalization)、の3段階である⁴⁾。クリスタラーの考えには、観光地域の変容とともに観光客のタイプも変化する、ということが明言されている。旅行者の特徴についての研究は広く行われているが、その旅行者の動機づけや欲求についての研究は、これまであまり行われて来なかった。一つの例は、コーエン (Cohen) によって考案された類型学 (typology) である。彼は観光旅行者 (のタイプ) を、「規格化型 (institutionalized) 観光旅行者」と「非規格化型観光旅行者」(non-institutionalized) に特徴分けし、後者についてさらに「放浪者型 (drifters) 観光旅行者」「探検家型 (explorers) 観光旅行者」「個人行動型観光旅行者 (individual mass tourists)」及び「団体行動型大衆観光旅行者 (organized mass tourists 科)」に分類した⁵⁾。プロッグ (Plog) による観光旅行者の心理研究、および旅行者を他者中心型 (allocentrics)、中間型 (mid-centrics)、心理中心型 (psychocentrics) というように特徴区分する研究は、クリスタラーの主張を具体的に実証するものである⁶⁾。プロッグの見解によると、観光地域はその進展にともなって様々なタイプの旅行者を引き付けている。つまり、初めは少数の冒険好きな他者中心型観光旅行者から始まり、次いでその観光地域の交通の便が良くなり、サービスが改善され、有名になると、中間型の旅行者が一層増加する。その観光地がさらに古くなり流行遅れとなり、しかも旅行者たちの居住地域と大差のない環境になってしまうと、心理中心型の旅行者に明け渡されて、旅行者数も減って行く。実際には旅行者の人数が長い期間にわたって減少することはないかもしれないが、(どんなに) 潜在能力のある市場でも、後から開発された観光地域との競争を余儀なくされるため、観光地域としての「市場」規模を縮小することになる。プロッグは自分の主張を次のように要約している。「我々は、ある範囲を越えて移動して行くような観光の目的地を、どのような「生活の」状態や時期であれ、思い浮かべることができる。しかもこの観光地域は、それ自体が消滅の可能性に向かって、ほとんど確実に進んで行くものである。観光の目的地は、それが一層商業化が進み、元々観光客を引きつけていた特質を失うようになると、それぞれ「の観光目的地が」進展する方向の中に、それぞれ自己崩壊の潜在的な火種 (the potential seeds of their own destruction) をはらむことになるのである。」

コーエンをはじめとする他の著者が、社会の変化が単線的に起こるとすること「考え方」には問題があるとして警鐘を鳴らしつつ来て一方で、観光地域発展の一般的形態は首尾一貫している「普遍である」、という確かな証拠があるようである⁷⁾。すなわち、「観光地域の」発展やその変化の程度は様々に変化するかもしれないが、その最終的

な結果は、ほとんどの場合、いずれも同じになるのである。

——地域の発展がもたらす循環性という仮説——

ここに示した〔観光地域発展の〕パターンは、生産物の循環概念 (the product cycle concept) に基づいたものであり、この生産物の循環概念とは、ある生産物の売上げが最初はゆるやかに進み、次に急速な割合で成長し、安定化し、最後は下降するというものである。言い換えれば、基本的に漸近曲線を示すということである。〔ある地域をとってみると〕①交通手段、観光施設及びその地域に関する知識の不足によって、最初に訪れる観光旅行者は小人数に限られる。②観光諸施設が整備され、(人々の)関心が高まるにつれて観光旅行者数は増加する。観光市場への取り組み、情報の普及及び一層の施設の整備にともなう、その観光地域に対する人気は急速に高まる。③しかしながら、観光旅行者に対する収容能力の水準が限界(値)が近づくにつれて、観光旅行者の増加率は、最後には下降していくことになる。こうした事態は、環境因子(environmental factors) (例えば、土地の不足、水質・大気質の悪化)、物理的施設(例えば交通機関、宿泊施設、その他サービス等)、及び社会的要因(例えば人の密集化、地元住民の憤り等)などの制約から、はっきりと認識されるかもしれない。その観光地域の魅力(the attractiveness)

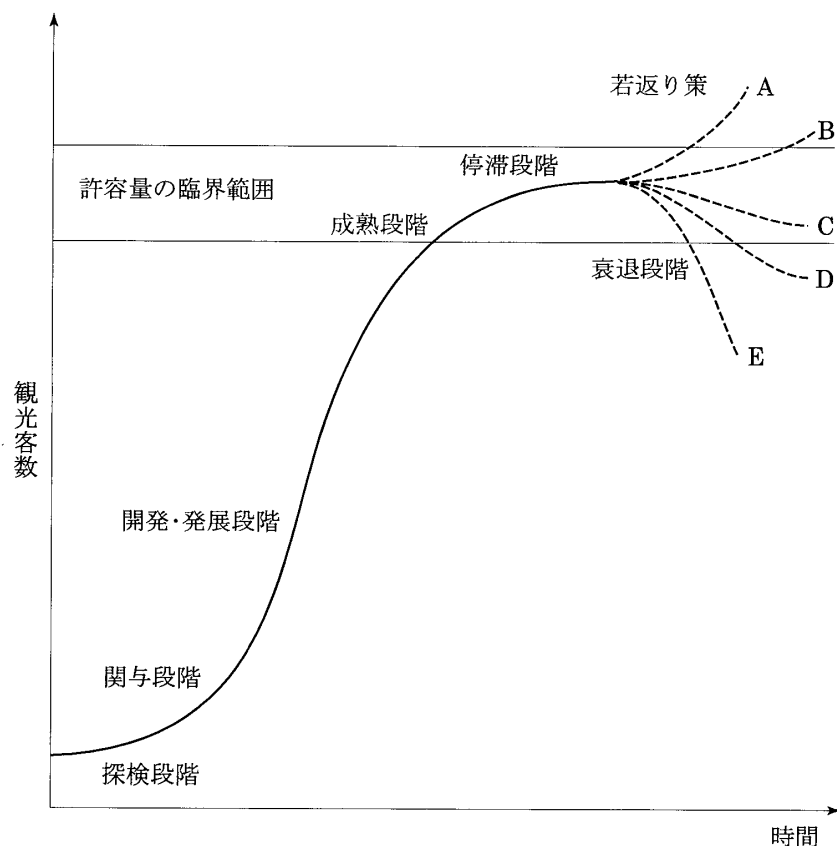


図1 観光地域の仮説的進化

が、適度な利用や旅行者の及ぼす影響のために、他の観光地域に比べて薄らいで行くにつれ、実際に訪れる観光旅行者の人数もついには減少してしまうことになる。

観光地域がたどると思われる「発展の」諸段階は図1に示されている。

(1) 「探検段階 (the exploration stage)」

観光の「探検段階 (the exploration stage)」では、観光旅行者の人数が少ないのが特徴である。こうした観光旅行者は、プロックのいうところの「他者中心型の観光旅行者」、コーエンのいうところの「探検家型の観光旅行者」であり、自分で旅行を手配し、不規則的な旅行パターンを行う人々である。クリスタラーのモデルによれば、この探検段階の観光客は、その地域独特のかなり特異な自然的又は文化的な特徴に引きつけられてやって来た・地元外からの旅行者である、とも言える。この段階では、観光旅行者のために特別に用意されている施設はないだろう。そこで地元にある施設を使用し地元住民との接触が高まることになり、そうしたことそれ自体が観光旅行者にとっては意義深いものになりうる。その観光地域がもっている自然的特性や社会的環境は、この種の観光旅行者によって変化することがなく、観光旅行者の往来は地元の定住者の経済生活にとっても、社会生活にとってもさほど大きな意味を持たない。この探検段階の実例は、カナダの北極地方 (Canadian Arctic) やラテン・アメリカで見られるが、こうした地域に向かう観光旅行者は、自然的・文化的かつ歴史的な特質に引かれて訪れるのである。

(2) 「関与段階 (involvement stage)」

観光旅行者の人数が増加し、それがある程度の規則性を示すようになるにつれて、地元住民の中には「関与段階 (involvement stage)」に参加しようとするものが現れる。①最初は観光施設の提供、それも専ら旅行者専用の施設の供給に関わりをもつようになる。観光旅行者と地元住民の接触は当然高まることが予想され、また実際に観光旅行者の食べ物の便宜をはかる仕事に従事する地元住民の人数が増加する。②この段階がさらに進むと、特別に観光旅行者を引きつけるための宣伝活動が行われ、やがて観光旅行者をはじめて受入れる基本的な市場 (a basic initial market area) が明確に形成されてくる。観光シーズンが発生することも予想できるようになり、少なくとも観光産業に携わる地元住民の社会的形態において、様々な調整が行われることになるだろう。観光旅行者の手配を色々なレベルで組織的に行うことが期待されるため、手始めに政府や公共団体に圧力がかかり、観光旅行者向けの交通やその他の観光施設の供給・改善を求めることになる。観光地域として比較的小さく、未開発な太平洋上やカリブ海の島々のいくつか、西ヨーロッパや北アメリカでアクセスの良くない観光地域の中には、このようなパターンを示しているものがある。

(3) 「開発・発展段階 (development stage)」

開発・発展段階 (development stage) は、ある面、観光旅行者を産み出す地域に対する強力な宣伝によって形成されたともいえるものであり、かなりはっきりした観光市場が形成されている地域 (a well-defined tourist market area) に現れる。この段階がある程度進むにつれて、地元が関与することや開発を抑制することは急速に減退することになる。地元で作られた観光施設の中には、[地域外の]外部の団体によって観光旅行者向けに特別に作られた・比較的大規模にして手のこんだ・しかも近代的な観光施設に取って代わられるため、姿を消してしまうものもあるだろう。自然あるいは文化的な観光対象物が新たに開発され、特別に市場向けに商品化されるようになると、これら [地元で作られた] オリジナルである観光対象 (original attractions) は、[外から持ち込まれた] 人工の観光施設を補うものとして付加されることになる。このような観光地域の外目に見られる色々な変化は、誰の目にも明らかなものとなり、そのためこの [観光地域の変化の] 全部がその地域の全住民に歓迎されたり、あるいは認められる、と期待することはできなくなる。この [開発・発展] 段階は、メキシコの幾つかの地域、より発展した太平洋上の島々、及びアフリカの北岸や西岸において見られるものである。[観光] 施設の計画立案やその提供に際して地方行政や国が参画することは、ほとんどの場合確実に必要とみなされる。しかし、そのことがまたその地域 [住民] の嗜好と完全に噛み合うとは限らない。[この開発・発展段階の] 絶頂期における観光旅行者の人数は、おそらく地元の定住人口に等しいか、あるいはそれを凌ぐものになるだろう。この段階が発展するにつれて、[外部から] 導入された労働力が利用されたり (例えば洗濯屋のような)、観光産業に関係する設備が登場することになる。より広域的な観光市場が発生するにつれて、観光旅行者のタイプが変化するようになり、プロッグの [観光旅行者の] 分類による中間型やコーエンのいう規格化型 [探検型] の観光旅行者が訪れるようになるだろう。

(4) 「成熟段階 (consolidation stage)」

成熟の段階 (consolidation stage) にはいると、観光旅行者の総数が依然増加を続けて地元住民の人数を凌ぐとしても、その増加率は減少することになるだろう。[この段階では] その地域の経済の主要な部分は観光産業と結びついている。[観光に関する] マーケティングや宣伝活動も広く行われており、観光シーズンや観光市場を拡大するために様々な努力がなされている。観光産業において大規模なフランチャイズやチェーン店も展開されることになるが、このような新たな加盟はあったとしても極く少数となる。多数の観光旅行者及び彼らのために作られた観光施設は、地元で少しも観光産業に係わっていない地元住民の中にある種の反発や不満を引き起こし、さらにその結果として、観光旅行者のいろいろな活動に対して何らかの剥奪や制約を加えるようになる。こうした

傾向は、カリブ海の沿岸地域や地中海の北部沿岸域等において明らかに見られる。これらのリゾート都市は、はっきりとレクリエーション活動地区と「他の地区とを」区分するようになり⁸⁾、しかも時間の経過とともに、古い観光施設はもはや用済みのもの (second rate) となり、およそ「観光的には」望ましくないものと見なされるだろう。

(5) 「停滞段階 (stagnation stage)」

この観光地域が停滞段階 (stagnation stage) にはいると、観光旅行者のピーク時の人数は、限界に達することになる。「観光活動に関わる」多くの変数をもつ収容力の水準 (capacity levels) は、それと関連する環境的、社会的および経済的問題の限界に達しているか、もしくはそれを越えてしまっているかもしれない。このような地域は、「観光的に」確固たる地位を築いたというイメージはあっても、そのイメージはもはや流行しているといえる状況ではない。「この地域は」繰り返し訪れる観光旅行者、及び交通の利便性がよくなじみのある交通形態「の存続」を、強くあてにしている。「観光地域で」余裕のあるベットの活用が図られ、観光旅行者数を維持するためにたゆまぬ努力が必要とされている。自然的な観光対象や正真な文化的観光対象は、おそらく外から持ち込まれた「人工的」な観光施設に取って替わられているだろう。そのようなリゾート地のイメージは、その「地域の」地理的な環境から切り離されたものとなる⁹⁾。新たな観光開発は、元からある観光地域の周辺部で行われ、現存の土地「観光地」は、その所有者が頻繁に入れ替わることになりそうである。スペインのコスタ・ブラバのリゾート (the Costa Brava resorts)、オンタリオ湖周辺の多くのコテージ・リゾート (cottage resorts) は、明らかにこうした特徴を示している。旅行者のタイプもまた、コーエンによって分類された、団体行動型の大衆観光旅行者 (the organized mass tourist) やプロッグのいう心理的特質をもつ観光旅行者へと変わっていく。

(6) 「衰退段階 (decline stage)」

衰退段階 (decline stage) にはいると、この観光地域は、より新しい観光資源を持つ観光地域と競合することができなくなり、空間的にも数量的にも観光市場を縮小することに直面する。ここ「この段階」ではもはや（長期滞留の）観光旅行者を引きつけることはないだろうが、多くの人々にとって交通の便さえ良ければ、週末や日帰りの旅行者などに徐々に利用されるようになるだろう。こうした傾向は明らかに、西部スコットランドのクライド湾 (the Firth of Clyde) のような、ヨーロッパでも比較的古いリゾート地域に見られる。マイアミ・ビーチもまたこの衰退段階に入りつつあると思われる。こうした観光地域では観光産業が遠のくにつれて、土地の転売率が高まり、観光施設はしばしば非観光関連の建物に取って代わられていく。こうした事柄は、ちろんのこと累積的に生じるのである。つまり、このような観光地域が観光旅行者を引きつけなくなるに

つれて、より多くの観光施設が姿を消し、[それにつれて]他の観光施設の生存の可能性も益々危うくなるのである。

観光市場の衰退に伴って、雇用者や他の地元住民もかなり安価に〔観光関連の〕諸施設を購入出来るようになるので、観光産業に対する地元の関与が、この衰退段階では増加することになる。つまり、多くの〔観光関連の〕施設が〔観光以外の〕活動に関連した施設に転身するということもありうる。[例えば] 普通のホテルが、分譲マンション、保養所や老人ホームあるいは普通のアパートになったりする。それは、多くの観光地域にある観光対象が、特に高齢者の永住地にとって〔観光地域と〕同様に魅力的な要素であるとみなされるからである。結局のところ、この観光地域の行き着く先は、全くのスラム化した観光地域 (a veritable tourist slum) となるか、あるいは観光の機能を完全に失ってしまう [したがって、他の用途に転用される] か、のいずれかであろう。

他方で、〔観光地の〕“若返り対策” (rejuvenation) が取られるかもしれない。当然、この〔若返り対策を採用する〕段階は、観光〔活動〕の基本となる観光対象〔資源〕に根本的な変革がなければ決して起こらない、ということは確かである。現在のところ、この〔若返りの〕目標の達成には2通りの方法があるといえる。その1つは、アトランティック・シティーのギャンブル・カジノに見られるように、人工的な観光魅力を付加する (the addition of a man-made attraction) 方法である。しかしながら、近隣しているあるいは競争している観光地域が、先例に習って同じことをすれば、明らかにその効果は減少する。すなわち、アトランティック・シティーが予想どおりの成功をおさめ得た第1の要因は、この都市が変革によって独自性を獲得したからである。

観光地域の若返りを図るもう一つの道は、まだ未開発の自然資源 (untapped natural resources) を利用することである。ヨーロッパの温泉街 (spa towns) やスコットランドの Aviemore の夏期保養村などは、ウインター・スポーツの市場に新たに方向転換することで若返りをはかり、それによって観光地域に年間を通じた観光産業をもたらすことになった。[この若返り対策は] また新しい観光施設の整備を経済的に可能なものとし、同時にこれまでの夏期中心的な余暇産業の活性化に役立っている。新しい形態のレクリエーション活動が出現するにつれて、他の観光地域でも、これまでは開発する上で正しく評価されてこなかったような天然資源を見つけ出すことが可能となる。

多くの場合、〔観光地域の若返り対策には〕行政と民間企業とが力を合わせる必要がある。そうすれば新しい観光市場が (典型的な循環の再開を予感させるような) 他者中心の人気のある場所となることもなく、むしろ特定の関係者や特定の活動を行うグループの集まる場所となるだろう。しかしながら、最終的には活気を取り戻した観光地域の観光対象物ですら、[やがて]その競争力を失って行くものと想像できる。真に独特な特性をもつ観光地域においてのみ、ほとんど時間を超越して観光の魅力を持ち続けるものと期待することができ、また訪れる人々の圧力にも抗しうるかもしれない。こうし

た場合〔観光地域〕ですら、観光旅行者を引きつけ続けるためには、人々の趣味や嗜好を時を越えて持続し続けるものでなくてはならないだろう。ナイアガラ滝などは、おそらくその一例だろう。見事なまでに成功を治めたデズニーランドやディズニーワールドのような・人工的な観光対象も、また現代人の嗜好に合わせながら観光対象に魅力を付加しつづけることによって、長期にわたって効果的な競争力を持ち続けるだろう。英国、アメリカ及び他の国々で確固たる地位を築いた観光地域の多くは、人々——何十年もの間、相も変わらずにこれらの観光地域で休暇を過ごすために来ている人々——を魅了している。そして、このような観光地域に繰り返して訪れる人々の嗜好は、ほとんど変化していないのである。しかしながら、こうした人々がどこに観光地域に出掛けようかと最初に選ぶ要因は、大抵の場合、ある種の嗜好に基づくというよりは、むしろ費用と交通の利便性にもとづいて決めているのである。

——「内在する様々な意味」(implications)——

観光地域が一貫した発展の段階をたどるという概念 (a consistent evolution of tourist areas) を説明して来たわけであるが、すべての観光地域が、他の観光地域と全く同様の段階を明確にたどるというわけではない、ということを今一度強調しておかねばならない。「即席に出来たりリゾート地 (instant resort)」として知られている観光リゾート地域が、確固たる地位を築いて行くその過程などは、こうした事例に当てはまる。例えばメキシコのカンクーン (CanCun) では観光開発のためにその適地を選ぶにあたって、すでに選考要因として候補に上がっているパラメータの中からコンピューターで〔その場所を〕選定するというプロセスを採用しているため、探検段階や関与段階はたとえ存在するとしてもおそらくほとんど意味を持たないことになる。このような〔プロセスの〕状況下では、開発・発展段階が〔観光地域発展の〕サイクルの最初の段階ということになる。しかしながら、このような場合でも、メキシコは、国家の規模でみると図1に示した発展サイクルを経験したということが出来る。それゆえ、発展サイクルの後半の各段階が、一般的に言えば観光開発、特に観光地域の計画立案や配置〔ゾーニング〕計画に適用される場合には、より重要だということである。

観光（開発）の計画を立てる時、観光地域はいつまでも観光地域でありつづけ、観光旅行者に魅力を与え続けるものである、という仮説が暗黙の内になされているように思われる。公共や民間の〔観光に関する〕機関は、観光地域やその観光地域にある観光対象には予め定められたライフ・スパン〔寿命〕があるというが、たとえあったとしても、それは極めてまれである。それどころか、これまでのところ観光産業は、景気の後退にもかかわらず、無限に成長をつづけそうな勢い〔ポテンシャル〕を示しているために、観光旅行者の数は増え続けるのが当然と考えられている。この前提が誤りであることは、南オンタリオのような古くからの観光地域が、過去20年にわたって経験したことを見れ

ば一目瞭然である。

図1に示されている「観光地域の発展の」過程は、観光旅行者の人数と時間の経過を示す・2つの軸で示されている。「観光地域の」許容水準 (capacity levels) に達した後に、どちらかの方向「軸」が増加することは、「観光地域」全体の「環境としての」質や観光地域としての魅力が低下することを、一般的には示している。初めて、観光旅行者がその観光地域を訪れた場合、その観光地域が「適正な受け入れの」許容水準の限界に達するはるか以前に魅力のない場所になっていると、彼等は他の未開発の地域を求めて移動してしまうことだろう。また、地元住民による観光旅行者に対する反応が、この期間「観光地域として許容水準に近づくまでの時間」を通して変化する、ということも予想される。この期間「の反応」とはDoxeyがその著書「irridex」(旅行者の苛立ち指数: index of tourist irritation)の中で述べているものである。すなわち、その「反応の」目盛り (scale) とは、幸福感 (euphoria) から無感動 (apathy)、苛立ち (irritation) を経て反感 (antagonism) に至る、というものである¹¹⁾。ごく最近の調査によると、観光旅行者に対する地元住民の反応は、必ずしも観光旅行者との接触が増えるからだとか、観光旅行者の数が増えるから、という理由だけで充分説明がつくものではないことを示している。それは観光旅行者や地元住民の性格、およびその観光地域に関連している特別な融和策 (arrangement) と関連をもち、より複雑な内容となるのである。

図1に示されている安定段階の時期以降に「観光地域発展の」の曲線が向かう方向性には、いくつかの解釈の仕方がある。例えば、アトランティック・シティーの例に見るように、若返りに成功すれば、曲線Aによって示されるような新たな成長や拡大が生じる。許容水準に若干の修正や調整を加えて、しかも地域資源の保護を依然続ける場合には、その先に続く成長率は、「Aより」はるかに下まわるものになるだろう (曲線B)。許容水準に「関係するすべての要因に」再調整が行われれば、この再調整が終わった後もより安定した観光旅行者数を獲得することが可能であろう (曲線C)。地域資源を過剰に使いつづけ、古い施設の代わりのものが投入されず、しかも他の観光地域との競争力が低下するようになると、極端な下降線をたどる (曲線D)。最後に、戦争、疫病、あるいはその他の大災害などの出来事が起こると、観光旅行者の数は急激な下降線をたどる (例えば、1969年以降に北アイルランドで見られたように)。このような出来事が起こると、相当な人数の観光旅行者を呼び戻すことは極めて難しいものとなる。もしこの「観光旅行者の人数の」低下傾向が長期に及ぶものとする、このような問題が解決された後までも、この観光地域やその観光施設が多数の観光旅行者を引き戻すことは、もはやないだろう。

この論文で述べている議論は、一般論であり、今日に至ってやっとかなりな量のデータによって立証されつつある。この基本的な仮説を検証し、そして特定「な観光」地域

について「発展に関する」曲線グラフを作成する際の主な問題は、ある特定の観光地域を訪れる観光旅行者に関するデータを長期に渡って入手しなければならない、ということである。このようなデータを入手することはなかなか出来ず、またそのようなデータが観光旅行者が初めて訪れた時点まで逆のぼれるということは、極めて稀なことである。しかしながら、2～3の地域について入手した30～40年間に及ぶデータは、この論文で述べてきた一般論を立証するのに役立っている。

同じ「観光地域の」発展の段階でも、その曲線の形はおそらく、観光地域の違いによって変わるものと期待されるにちがいない。それは観光地域が、開発の程度、観光旅行者の数、交通の利便性、政府の政策、および似かよった競合状態にある観光地域の数、といった要因によって多様な様相を示すからである。例えば、レクリエーション地域への交通の便が改善されるたびに、観光旅行者の数は著しく増加し、その観光市場の拡大をもたらすことは明らかになっている¹³⁾。イギリス、フランス、オンタリオ及びアメリカの北西部におけるリゾート地域は、このような発展の過程を目のあたりにしてきた¹⁴⁾。もし仮に観光施設の整備や交通の利便性の確保が、理由は何にせよ遅れたりすれば、(例えば地元の反対、資金の不足、外部への無関心など) 探検の段階は予期していた以上に長くなるだろう。新しい“即席に建設されたリゾート地域”(instant resorts)の場合、こうした地域では、観光旅行者の施設は先住者がほとんど、あるいは全く居無い場所に建設される。そのため、図1における最初の2段階は、ほとんど意味がないか、あるいは抜け落ちてしまい、ノロンハ(Noronha)の指摘した幾つかの発展途上国に特に当てはまるような状態になるだろう¹⁵⁾。古典的で、すでに確固たる地位を築いている世界の観光地(例えば、何十年にもわたって観光旅行者の人気を保っているような場所)は、予想された「発展」段階のすべてを経て来たという、証拠をしばしば明らかに示している。地中海の北部、イギリス、アメリカの北西部海岸地帯及びフロリダのいくつかの地域に見られるリゾート地域は、それぞれ着実に発展段階を経て来ている。ハワイ、カリブ海や太平洋の島々及び北アフリカのリゾート地域など他の地域は、「観光地域発展の」サイクルのうち比較的初期の段階にあるが、旅行者数の増減パターンは、図1に示された曲線に極めて近いものとなっている。

こうした観察から見ても、観光地域の開発計画の立案、建設及び運営に責任を持つ人々の側はこれまでの姿勢を変える必要があると言えよう。観光旅行者を誘引する資源は、無限にあるものではないし、また永遠に存続するものでなく、したがって有限でありかつ再生出来ないものであると見なし、またそのように扱われるべきものである。それゆえ、資源は十分に注意深く保護され、保全されるべきものである。そうであるならば、観光地域の開発は予め決まっている「地域資源のもつ」許容能力の限度内(within predetermined capacity limits)にとどめられることにより、「観光地域のもつ」潜在的な競争力も比較的長期間にわたって維持することが可能になる。こうした配慮があれば、

一時的に観光旅行者の最大人数が、短期的な開発による最大の観光旅行者の人数を下回ったとしても、長期間ではより多くの観光旅行者が見込まれるのである。2～3の観光地域では、すでに観光産業の発展限度 (limits to the growth of tourism) を設けており、その主な理由は観光の発展が観光資源に対して重大な環境的破損をもたらすためである (例えば、イギリスにおけるストーンヘンジの損傷、スペインやフランスにおける有史以前の洞窟壁画の破損など)。より多くの知識を得て、しかも観光地域が形成されてゆくその発展段階に対する認識がより一層深められなければ、プロッグの言うように、「世界で最も魅力的でしかも興味深い地域の多くは、観光地域の遺跡と化してしまう運命にある」という結論に達せざるを得ない。

あとがき (acknowledgments)

私は、Lavel 大学の国際二ヶ国語研究センターの、J. E. Brougham 氏のこの論文に賜った貴重なご意見とご尽力に対して慎んで感謝の意を表したい。

注と参考文献 (notes and references)

- 1) R. I. Wolfe, 'Wasaga Beach — the divorce from the geographic environment,' *The Canadian Geographer*, 2 (1952), pp. 57-66.
- 2) W. Christaller, 'Some considerations of tourism location in Europe: the peripheral regions — under-developed countries — recreation areas,' *Regional Science Association Papers*, 12 (1963), p. 103.
- 3) C. Stansfield, 'Atlantic City and the resort cycle,' *Annals of Tourism Research*, 5 (1978), p. 238. 4) R. Noronha, *Review of the Sociological Literature on Tourism* (New York: World Bank, 1976).
- 5) E. Cohen, 'Towards a sociology of international tourism,' *Social Research*, 39 (1972), pp. 164-82.
- 6) S. C. Plog, 'Why destination areas rise and fall in popularity,' Unpublished paper presented to the Southern California Chapter, The Travel Research Association, 1972.
- 7) E. Cohen, 'Rethinking the sociology of tourism,' *Annals of Tourism Research*, 6 (1978), pp. 18-35.
- 8) C. A. Stansfield and J. E. Rickert, 'The recreational business district,' *Journal of Leisure Research*, 4 (1970), pp. 213-25.
- 9) Wolfe, op. cit.
- 10) F. P. Bosselman, *In the Wake of the Tourist* (Washington, DC: Conservation Foundation, 1978).

- 11) G. Doxey, 'Visitor-resident interaction in tourist destinations: inferences from empirical research in Barbados, West Indies and Niagara-on-the-Lake, Ontario,' Unpublished paper presented to the Symposium on the Planning and Development of the Tourist Industry in the ECC Region, Dubrovnik, Yugoslavia, 1975.
- 12) R. W. Butler and J. E. Brougham, *The Social and Cultural Impact of Tourism — A Case Study of Sleat, Isle of Skye* (Edinburgh: Scottish Tourist Board, 1977); J. E. Brougham, 'Resident Attitudes Towards the Impact of Tourism in Sleat,' unpublished PHD dissertation, University of Western Ontario, 1978; and P. E. Murphy, 'Perceptions and preferences of decision-making groups in tourist centres: a guide to planning strategy,' in *Tourism and the Next Decade: Issues and Problems* (Washington, DC: George Washington University, 1979).
- 13) C. A. Stansfield, 'The development of modern seaside resorts,' *Parks and Recreation*, 5: 10 (1972), pp. 14-46.
- 14) E. W. Gilbert, 'The growth of inland and seaside health resorts in England,' *Scottish Geographical Magazine*, 55 (1939), pp. 16-35; D. G. Pearce, 'Form and function in French resorts,' *Annals of Tourism Research*, 5 (1978), pp. 142-56; R. I. Wolfe, 'The summer resorts of Ontario in the nineteenth century,' *Ontario History*, 54 (1964), pp. 150-60; and Stansfield, 'Atlantic City.'
- 15) Noronha, op. cit., p. 24.
- 16) Plog, op. cit., p. 8.